OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	傷つきやすさの現象学
Author(s)	浜渦, 辰二
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77129
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

第６章　老化の時間的構造

――レヴィナスの老いの現象学の解明を通して――

古怒田　望人

はじめに

老化とは人間存在が避けがたく出会う現象である。それは身体が、様々な側面において、朽ちてゆく傷つきやすさの現象だ。しかし、老化は、65 歳以上ないし 70 歳以上の「成人期に続く人生最後の時期」[1]という医学的、生物学的に客観化された老年期のあり方のみを示しているのだろうか。

ところで、フランスの現象学者、エマニュエル・レヴィナス(1906 - 1995)はその晩年に老化について集中的に記述している。例えば、以下のような 1974 年の記述を参照したい。

> 時間―回帰なき失われた時―が隔時性であり、私と関わるのは、記憶による回収を越えた老化としてである。
>
> 時間のこのような隔時性は、再現前化の射程を超える間の長さに由来するものではない。(老化という)隔時性とは自同性の分裂であり、その分裂において同と同が再び結合することはない。非総合であり、倦怠(lassitude)なのだ。(AE,88/一三四,下線、カッコ内は引用者)

注目すべきはレヴィナスが老化を身体的現象としてだけではなく[2]、「時間的構造」、つまり「老いゆく」という流れの現象として記述しようとしていることである。

そして、このような記述には同時代の哲学者であるウラジミール・ジャンケレヴィッチ(1903-1985)の影響がある。レヴィナスに先立つ 1966 年に、彼は以下のように述べている。

> 老化において、そして、老化によって、時間性のなんだか分からない触知できないものは、具体的な、そして個性をもった過程として目に見えるようになる。このよう

[1] 『看護大辞典』,2002,2837

[2] レヴィナスにおける老化の身体的側面の記述に関しては古怒田,2018 を参照

な過程自体が、内側から見たとき、ある限定されない、そして部分的には動機のない倦怠(lasstitude)の経験に対応する。生物学上の疲労と生命の跳躍の衰頽だけでは、これを説明するのにかならずしも十分ではない。(Jankélévitch,1966,189/二〇六,下線は引用者)

ジャンケレヴィッチにおいても、レヴィナスにおいても、老化とは同じように倦怠(lassitude)に対応するものであり、その現象において、ある種の時間的構造が見出されるとみなされているのだ。

確かに、老化のうちに倦怠が現れるという議論自体は珍しいものではない。老化は端的に言って身体の衰弱なのだから。

しかし、「老いゆく」という時の流れがどのようなものなのかは明瞭ではない。つまり、老化の時間的構造とはどのようなものなのか、そして私たちの生においてその時の流れは何を意味するのだろうか。ジャンケレヴィッチが述べるように、それは「生物学上の疲労」という生物学的に客観化された現象に還元されるものではないだろう。

本論では、レヴィナスが老いの現象学において展開した老化の時間論を、その時間論形成に大きな影響を与えたジャンケレヴィッチの老化の考察への参照を通して解明する。この解明を通して、老化の時間的構造を明らかにしたい[3]。

第一節　中期レヴィナスにおける老化の時間論——障害としての老化——

本節では先に見た晩年のレヴィナスの老いの現象学がどのように形成されていったのかを見てゆくために、中期レヴィナスの老化の時間論を概観したい。

まず講演、「可能なものの彼方」(1959)における以下のような記述から始めてみたい。

この講演の原稿の中でレヴィナスは以下のように老化を記述している。

その語の際立った意味での繰り延べという時間、また意識として生起する時間、この時間は、それとしては、主体における老化の生起なのではないか。老化とは、この(繰り延べという)時間において積み上げられてゆく決定的なものだろう。すなわち、存在

[3] 哲学思想史的にも、近年、ジャンケレヴィッチ哲学がレヴィナスの思想形成に与えた影響は大きく注目されている(ex.Bastiani,2017)。

の決定的なものを問いただし、不可避的なことを繰り延べるこの時間とは、不可逆性そのものなのだ。(Œ2,309/三二〇,カッコ内は引用者)

この記述に対して様々な分析が可能だが、ここでは時間論的観点に絞り、レヴィナスが老化を「不可逆性」とみなしていることに注目したい。レヴィナスにとって老化とは取り返しのつかない「不可逆な」時間の流れなのである。

では、レヴィナスはこの「不可逆性」という概念を通して老化の時間的構造をどのように記述するのだろうか。中期の主著である『全体性と無限』(1961)における以下の記述をみて頂きたい。

> もっとも軽やかで、もっとも非定住的で、もっとも無償で、未来に向かってもっとも飛翔している存在における自我の恒久的持続それ自体が、取り返しのつかないことを生み出し、それゆえ限界づける。取り返しのつかないことは、それぞれの瞬間に私たちが思い出を保存するという事実に起因するのではない。そうではなく、思い出が、これとは反対に、過去の朽ちがたさ〔…〕に基づけられているという事実に起因するのである〔…〕たとえ現在の瞬間が未来のすべてによって厚みのあるものだとしても、現在の瞬間にこの回帰が重くのしかかる、つまり「過去全体に満ちている」。現在の瞬間の老化は、そのもろもろの権能を限界づけ、また、死の内在性を現在の瞬間に対して開く。(TI, 315/二二三〜二二四㊦)

老化の時間性は、不可逆であるがゆえに「過去の朽ちがたさ」という現在の権能によっても「取り返しのつかないこと」を生み出す。

注目すべきなのは、レヴィナスが老化の不可逆性が生むこの過去を「過去全体(tout le passé)」と呼んでいることだ。明らかにレヴィナスは老化が生む「過去」を、通常の想起可能な思い出とは水準の異なった「過去」として呈示している。というのも、あくまでも思い出される過去というのは、一断面として切り取られた「一つの過去(un passé)」であって過去の「全体」ではないからである。

では、なぜ老化が生む過去は、「過去全体」なのだろうか。

この記述の形成には、アンリ・ベルクソン(1859-1941)の時間論の影響があるとみられる[4]。

というのも、以下の引用が示すように、レヴィナスはベルクソン的な持続のうちにこの「過去全体」が眠っていると述べているからだ 。

> 過去が瞬間ごとにとらえかえされる、新たな点から、ベルクソン的な持続になおものしかかっているような連続性によってまったく損なわれることのない新しさから、とらえなおされるのである〔…〕。存在がそこで過去の重荷を負う(ベルクソン的な)連続性において、実際、過去は存在の無限性を限界づけ、そして、その限界は、存在の老化のうちで表面化する。(TI,311/二一五㊦,カッコ内は引用者)

「ベルクソン的な持続」(＝「連続性」)のうちに、老化が生む取り返しのつかない「過去の重荷」が現れるとレヴィナスはみなすのだ。

では、ベルクソン自身は老化をどのように論じているのだろうか。この点を明らかにすることで、レヴィナスの記述する老化の時間的構造である「過去全体」の内実を明らかにしたい。

その主著『創造的進化』(1907)において、ベルクソンは老化を以下のように論じている。

> 生きている有機体は持続するものである。その過去全体が、現在に引き伸ばされ、そこで現勢的なのものとして作用を及ぼし続けている〔…〕私は特に自分の身体を考えてみると、自分の意識と同じように、身体も幼年から老年へと少しずつ成熟しているのが分かる。私と同様、私の身体も年をとるのである。それどころか、成熟も老化も厳密に言えば、私の身体の属性でしかない。(Bergson,1907,16/三五-三六,下線は引用者)

このようにベルクソンは老化を持続という時間の流れにある存在が現在に引き伸ばされる仕方で「過去全体」を生きる仕方とみなしている。つまり、ベルクソンにおいても老化の時間的構造とは「過去全体」を含むものなのだ。レヴィナスはこのようなベルクソンの議論に影響を受けて中期の老化の議論を展開したと言いえる。

では、このような老化における「その過去全体が、現在に引き伸ばされ、そこで現勢的

[4] 合田,2006,218 も参照。

なのものとして作用を及ぼし続けている」仕方とはどのようなものなのだろうか。というのも、その仕方が分かることで、ベルクソンの言う「過去全体」という特異な過去の水準も明らかになるはずであるからである。

その点についてベルクソンは以下のように述べている。

> 持続とは、未来を侵食し、前進しながらも膨らんでいく過去の連続するところの進展である。過去は絶えず増大するものである以上、無際限に自らを保存するものである。〔…〕実際、過去はおのずから自動的にみずからを保存する。おそらく、あらゆる瞬間に過去全体がわれわれにつきまとう。幼い頃からわれわれが感じ、考え、欲していたものがそこにあり、そこに加わろうとしている現在へと向かい、それをそとに締め出しておこうとする意識の扉を押す。〔…〕おそらくわれわれは、自分の過去のわずかな部分と共にしか考えていない。しかし、われわれは、生まれつきの心の湾曲を含む過去全体と共に、欲し、意志し、行動している。それゆえ、われわれの過去は、ほんのわずかな部分しか表象にならないが、その圧力によって、傾向の形で、その姿全体をわれわれに現わす。(Bergson,1907,5-6/二二-二三,下線は引用者)

このように「過去全体が、現在に引き伸ばされ、そこで現勢的なのものとして作用を及ぼし続けている」仕方とは、ある個体が生成変化するたびに保存されてゆく過去の総体が潜在的に作用すること、言い換えれば、「老化する」というプロセスの瞬間瞬間に暗に過去の実在が関わる仕方を意味する。

それゆえ「過去全体」とは、特定の思い出(=「一つの過去」)のようなものではなく、個体が生きてきた過去の総体を意味する。レヴィナスにおける「過去全体」もこのような水準での過去を意味すると言いえる。すなわち、老化に関わる過去とは、ある存在が「あった」という事実そのもの＝過去の実在そのものを意味するのである。

しかし、同じように老化を捉えつつも、レヴィナスはベルクソンの『創造的進化』における老化の議論とは別の「過去全体」の構造に着目している。というのも、ベルクソンの老化の議論において「過去全体」とは、「未来を侵食し、前進しながらも膨らんでいく過去の連続するところの進展」という持続における潜在態であり、そこでは絶えざる現在から「未来」へのある種の「創造」に重きが置かれているが、レヴィナスの老化の記述においては、過去の実在そのものが老化の時間的構造において「滞留」することそのものに目が

向けられているからだ。レヴィナスが注目する「過去全体」の構造とは、持続において絶えず生成変化しつつ自らを保存する「過去全体」ではなく、「過去の朽ちがたさ」という過去の実在の「残存」なのである。ベルクソンの時間論に基づきつつも、レヴィナスは老化の時間的構造が生む過去の実在の「滞留」という点を強調しているのである。

ここからレヴィナスは「老化」を「障害」として記述する。「存在の無限性」を限界づけると言われていたように、老化は、現在の行為と未来の地平を妨げる「過去全体」を生み出す。老化は、ベルクソンがみたような生成変化するものではなく、硬直化した、言い換えれば、取り返しのつかないもの、「過去の朽ちがたさ」という現在の行為に対する「障害」なのだ。そして、「死の内在性を現在の瞬間に対して開く」と言われたように老化は「死」という消失に向かう流れとみなされている。老化の時間的構造は、中期レヴィナスにとって、私たちの生に障害と消失を招くものなのだ。

第二節　後期レヴィナスにおける老化の時間論――死に対する「意味」としての老化――

後期レヴィナスにおいても、「不可逆性」を軸とした図式が、老化の時間的構造の記述のために、引き続き用いられる。しかし後期においては、中期とは真逆に、この図式のポジティブな側面が強調されるようになる。本論ではその意義の抽出の契機をジャンケレヴィッチの老化の考察にみたい。

以下のようなジャンケレヴィッチの考察はレヴィナスのこれまでの記述と呼応しており、本論がこれから展開する議論の裏付けとなる。

> しかし記憶は単に現在の連続化作用ではない。それは同時に、当の連続化作用を通じての、過去の残存なのであり、しかも生成の沈殿物、産出物として生成から逃れることが可能となった過去の残存なのである。(Jankélévitch,1959,125-126/一七〇)

ジャンケレヴィッチもベルクソン的な現在における持続以上に、過去が「滞留」すること(「過去の残存」)に注目しているのである。

この過去の「滞留」という点に注目しつつ、まずは本節では後期レヴィナスの主著『存在の彼方へ』(1974)における老化の時間的構造の記述を概観したい。それにより後期レヴィナスの晦渋な現象学を整理したい。

後期レヴィナスは以下のように老化を記述している。

> 経過(laps)―時を失うこと―としての時間化は正確には自我のイニシアチブでもなければ、行為の何らかの***テロス***へと向かう運動でもない。時を失うことはいかなる主体の所産ではない。すでに、そこでフッサールの現象学的分析が言語を乱用しつつ経過(laps)を取り戻す過去把持と未来予期の(この時を失うことという)総合はすでに、自我なしで過ぎ去る(se passe de Moi)。時間は過ぎ去る。***この忍耐***して成される総合―これは深淵に、受動的と呼ばれるが―この(受動的)総合は老化である。老化は歳月の重みのもとで炸裂し、また不可逆的に(irréversiblement)、現在から、言い換えれば再-現前化から自らを引き離す。自己意識のうちにあるもの、それはもはや自己に対する自己の***現前***ではなく、老化である。時間―回帰なき失われた時―が隔時性であり、わたしと関わるのは、記憶による回収を越えた老化としてである。(AE,87-88/一三三～一三四,強調は原典、カッコ内、下線は引用者)

複雑な記述だが、老化の時間的構造という点から見ると、ポイントは二つある。

まず、老化によって不可逆的に滞留する過去の実在が反復不可能な唯一性(「回帰なき失われた時」)としてポジティブに強調されるようになっている。

より具体的な発言を引用すれば、後期レヴィナスにおいて老化とは「〔…〕おそらく、死それ自体にその死の意味を付与する退去」として記述される(cf.DQVI,141/一七三)。老化の時間的構造において滞留する過去全体は、その「老いゆく」という死＝消滅への自らのみちゆきそのものに消えることのない意味を与える出来事なのだ。『全体性と無限』では老化は死に向かう現象として単に理解されていたことと、ここで対照することができる。

次に、老化の不可逆的時間性が「時間は過ぎ去る」という時間性そのものの構造として記述されている。老化の不可逆的時間性とは時間性そのものなのだとレヴィナスは語るのだ。

では、このように晩年のレヴィナスが老化の時間的構造の意義を示し、かつ時間性において本質的なものとして見出すことができたのはなぜなのだろうか。言い換えれば、なぜこのような変化が可能になったのだろうか。

この変化を考える前に、後期レヴィナスの老化の時間的構造の記述がどのようなものなのかを、「受動的総合」と「隔時性」という先に老化の時間的構造とされた概念を手がかり

として解明し、議論をクリアーなものにしたい。

「受動的総合」とは本来、フッサール現象学において、感覚されるものと感覚するものというプリミティブな水準で生じる意識作用の時間的な原初的連続性をひとつには意味する(cf.EDE,310-311/三二六～三二七)。しかし、レヴィナスがこの受動的総合という概念においてみているのは、先の引用文が示すように、フッサールのそれとはやや異なっている。それは「主観なき意識」という点、「いかなる主観もそれに対して主導権を要求しえない」ような、「時間の『能動的受動性』」である(cf.EDE,310-311/三二七)。つまり、「受動的総合」という概念をとおして、レヴィナスは意識主観の能動的な想起＝再現前化の働きの手前で時間が不可逆に過ぎ去るあり方を記述しているのである。

そして、以下の記述が示すように、レヴィナスはこのような能動的な意識の想起＝再現前化作用(「記憶」、「歴史」)よりも既に過ぎ去る時間性としての受動的総合を「老化」と呼ぶのである。

> なぜ、「語ること」は存在の曝露ないし存在論に正当な根拠を与えることができるのか。それは、時間という経過(laps)が回収不可能なもの、現在という同時性に逆らうもの、再現前化不可能なもの、記憶にはないこと、前-歴史的なものでもあるからだ。把握および再認という諸々の総合に先だって、老化という絶対的に受動的な「総合」は成就される。老化というこの「総合」によって、時間は*自己*を越えて過ぎ去ってゆく。(AE,48/一〇〇，強調は原典、下線は引用者)

「経過 laps」の語源となっているラテン語の「lapsus」は、その動詞形において、「滑り落ちること」を意味する(cf.伊原木,2010,125)。老化としての受動的総合とは、意識の想起＝再現前化作用という主観の能動的な記憶作用からは根本的に滑り落ちてゆくような不可逆で、取り返しのつかない時間の流れなのである。

そして、このように能動的な主観の能動的な記憶作用に還元されない時間的構造をレヴィナスは「隔時性」と呼ぶ。

> 記憶にはないことは記憶の脆弱さの結果ではないし、時間の大きな間隔を乗り越えられない無能力の結果でもないし、きわめて深遠な過去を蘇らせられない無能力の結果でもない。時間の散逸が現在として集約されることの不可能性、回収不可能

な時間の隔時性、〔…〕それが記憶にはないことである。(AE,48/一〇〇〜一〇一,下線は引用者)

能動的な記憶の水準に回収不可能な時間構造、それが「隔時性」なのである。

このようにレヴィナスは「受動的総合」ないし「隔時性」という術語で能動的な主観の想起＝再現前化に還元不可能な不可逆な時間的構造に目を向けているのである。そしてこのような時間構造こそが時間の本質であり、老化において現実化すると述べるのだ。

さらに、ここで老化として現実化する「隔時性」とは、中期で論じられた「過去全体」結びつくものだと推察される。なぜなら、後期において老化の時間性の特徴とされた「経過(laps)」、つまり時間が意識の能動性に反して「滑り落ちること」には、想起＝再現前化作用による記憶には回収できないような過去の水準が眠っていると記述されているからである。

記憶にはない再現前化することもできず不可視的でもある過去、現在を必要としない大過去としての過去は、根拠のない経過(laps)としての過去に転落してゆく。この過去を想起によって回収することができないのは、それが遥かに遠ざかった過去だからではない。そうではなく、現在と同一単位では測れないがゆえに、この過去は想起によって回収されることがないのだ。(AE,13/四一〜四二,下線は引用者)

老化の時間性、つまり「隔時性」のうちには、現在に対して同一的な時系列において古いという意味での過去ではなく、現在とまったく水準の異なった、「隔時的過去」(cf.AE,18/五〇)が眠っているのである。このような過去の水準は、中期の老化の時間論でみられた「過去全体」に対応するものだろう。というのも、「過去全体」は、想起されうる一つの思い出のようなものではなく、そのような想起＝再現前化され記憶に組み込まれうる過去に還元されることのない潜在的な過去の実在そのものだったからだ。

とはいえ、想起＝再現前化不可能という点だけで、中期の「過去全体」と後期の「隔時的過去」の間に連続性を見いだすことは困難なようにもみえる。しかしながら、後期レヴィナスは老化の不可逆的時間性が生む「過去全体」が見出されたベルクソン的「持続」を、隔時性という受動的総合の「実現」として記述している。

持続――老化としての持続とはおそらく、***経過(laps)***の受動性を起点とした受動的総合の実現そのものなのであり、過去を再現する記憶のいかなる作用も、この経過の不可逆性を取り戻すこと(反復すること)はできないのだ。(EN,153/二〇二~二〇,強調は原典)

「持続あるいは時間の隔‐時性」(cf.EN,176/二三七)とも言われるように、ベルクソン的な「持続」は、後期レヴィナスにおいて「隔時性」、「経過」の一つのモデルとなっている。それゆえ、中期においてレヴィナスが老化の時間的モデルとしたベルクソン的持続は、「隔時性」と後期でみなされる概念に置換されている。そうである以上、後期レヴィナスが記述する「隔時的過去」は、持続における過去の実在そのものとしての「過去全体」と連続したものだと推察される。

そして、「過去全体」が、ベルクソン的な「持続」よりも、「隔時性」という概念に結びつけられて記述されるようになったのは、先に見たように、後期レヴィナスが老化の時間的構造に中期に見出したのとは異なった死に対する「意味」としての老化の構造を見出したからである。

では、なぜレヴィナスはこのような老化の時間的構造における「意味」を見出すことができたのだろうか。

ここで本論では、この理由を「受動的総合」というフッサール現象学的な術語が使われているにもかかわらず、ジャンケレヴィッチにおける老化の時間論に注目したい[5]。なぜなら『死』(1966)においてジャンケレヴィッチは老化を「傷つきやすさ」の経験とみなしており(cf. Jankélévitch,1966,408/四四五)、傷つきやすさから事象の記述を試みた後期レヴィナスと呼応するものだからである[6]。

---

[5] 後期レヴィナスの時間論をフッサールの展開した感性的時間論として解釈する立場があるが、レヴィナスははっきりとフッサールの感性的時間論がいわゆる隔時性の議論とは相いれないものであることを述べており(AE,59/九一)、後期レヴィナスの時間論の源泉は別の哲学に求める必要があると考える。
ジャンケレヴィッチも『第一哲学』(1953)においてフッサールの「生きられた現在」への間接的な批判をおこなっている(cf.Jankélévitch,1953,12)。

[6] 『他者のユマニスム』(1972)の序文(『他者のユマニスム』,12/一九～二〇)においてレヴィナスはジャンケレヴィッチの『死』を紹介している。それゆえ、『存在の彼方へ』以前にレヴィナスはジャンケレヴィッチの『死』を読んでいたことになる。

第三節 ジャンケレヴィッチの老化論――倫理としての老化――

まず、ジャンケレヴィッチは老化の時間的構造を「純粋な時間」と呼ぶ。

> 老人が時間に関する観念をまったくもたないとしても、過ぎ去った時間はなおも老人の肩に重くのしかかることだろう。というのは、われわれを老化させているのは純粋状態の「時間」だからだ。純粋な時間(le temps pur)、つまり漸進的な感覚の荒廃、すべての新鮮さの枯渇、あらゆる跳躍、情熱的な確信の鈍化、すべての無垢さの消耗だ。(Jankélévitch,1966,190/二〇六,下線は引用者)

主体とは無関係に、つまり、受動的な仕方で、不可逆に過ぎ去ってゆき、消耗させる時間の生成そのもの、それがジャンケレヴィッチにおける老化の時間性である。

そしてこのような、「時間」に触れる出来事として老化は記述されている。

> 人はときどきしか時間を意識していない。あるいはもっと正確に言えば、人は、常時、時間を考えてはいない。というのは、連続する時の意識は、非連続的な意識だから。生成に対する注意、生成に対する覚醒は、普通は眠っているのだ！言葉を変えるなら人体(organisme)の連続的な変態は、時を隔てて、つまり断続的に、不規則に意識に現れる。老化はだんだんと進行するものだが、老化を捉える意識はそうではない。そして仰天するような(老化の)発見の後で、〔…〕(老化を意識することのないまま老化してしまったという)逆説的な無頓着の皮肉を知ることがある。(Jankélévitch,1966,213/二三一,カッコ内、下線は引用者)

通常は潜在的である「時間」が、身体(「人体」)の断続的な変化を通して意識させられる現象が、老化なのである。

それでは、このような老化が関わる「時間」の本質とはなんなのだろうか。それをジャンケレヴィッチは、まさに「不可逆性」であると見なすのである。

> そして、同様に、不可逆性は時そのもの、時間の自己性(ipséité temporelle)であり、時間性の本質だ。さらに言うなら、不可逆性は時間の時間性そのものだ。「生成」する

ということばそのものが、すでに生きられた時間の還元不可能な方向を示している。(Jankélévitch,1966,286-287/三一〇)

老化の不可逆性は、時間性そのものの本質でもあるのだ。ここから、後期レヴィナスは老化の不可逆的時間性を時間性そのものと見なしたと考えられる。

実際、後期レヴィナスは 1985 年のジャンケレヴィッチに関する論文において、多岐にわたるジャンケレヴィッチ哲学を生成の「「過ぎゆく」もろもろの瞬間」(HS,一四三/117)、「時間の「時間化」そのもの」(同,一四五/119)の哲学と理解し、この哲学を「哲学の問題そのもの」とまで呼んでいるからだ(同,一四三/117)。後期レヴィナスがジャンケレヴィッチの時間論を重要視していたことは明らかだろう[7]。

では、ジャンケレヴィッチにおける、不可逆性=老化という「時間」の構造はどのようなものなのか。

ジャンケレヴィッチの不可逆性の議論の要点は三つある。まず、1)死に向かって不可逆的に過ぎゆく「否定的な」時間であること、2)反復不可能であること 3)反復不可能であるがゆえにそれぞれの不可逆な瞬間は一回きり(semalfactif)の唯一なものであること、これらの三点である。このようにジャンケレヴィッチの「不可逆性」概念は死という否定性を孕みつつも、各瞬間の唯一性を確保する肯定的なものでもあるというパラドクサルな概念である[8]。

この 2)と 3)を、ロール・バリラスのジャンケレヴィッチ時間論に関する発言から確認したい。

> 各瞬間は一度きりしか到来しない、それが不可逆なことの法則である。〔…〕
>
> 各瞬間に含まれた不可逆性はジャンケレヴィッチが作り上げた次のような概念において表現される。それは、「最初で最後であること(primultimité)」である。そのつどそのつどは最初で、最後である、各瞬間は最初で最後であることなのだ。そのつどそのつどは一度きりしか生起しない、そしてこのために、そのつどその

[7] 合田,2006,224 も参照。
付言すれば、ジャンケレヴィッチは初期の著作 *La mauvaise conscience*(1933)の時から、老いを不可逆性から論じており(cf.Jankélévitch,1998,84-100)、中期のレヴィナスの老いの解釈自体そのようなジャンケレヴィッチの思想に影響を受けている可能性がある。

[8] この「パラドクス」はジャンケレヴィッチ哲学の主要な原理である。詳しくは Hansel,2012 を参照。

つどは一回きり(semalfactive)なのだ。(Barillas,2017,126)

そしてこの各瞬間の唯一性は、ある過去の時間の水準に関わることになる。それは各瞬間が反復不可能であるがゆえに消えることのない「存在した(l'avoir-été)」 という過去の実在そのものの水準である。過去の実在そのもの、「過去全体」、つまりその「事実＝コト(fait)」は時間の不可逆性において反復不可能であるがゆえに、唯一かつ永遠のものとなる。

このような現象をジャンケレヴィッチは、「コト性(quoddité)」と呼ぶ。

ここで、フローラ・バスティアーニのジャンケレヴィッチにおける「コト性」に関する分析を引用しよう。

(死の)破壊は、まさに、実存者のある種の次元に触れる。だが、それでもなお(死の破壊から)無傷のままでとどまることがあり、それは「なんだかわからないもの」、「存在したという事実＝コト」に属している。すなわち、存在した(avoir-été)、は、ここで、実存者の過ぎゆき(passage)、過ぎゆいたそのつどが、「コト性」として残存するある種の痕跡を残すことを意味する。(Bastiani,2017,230,カッコ内は引用者)

人がいつ、どこで、どのように生きたかという「何性」、「一つの過去」は、例えば思い出の忘却という仕方で、消滅しうる。そして、死へのみちゆきは絶対的な消失へのみちゆきだ。

だが、存在したという「事実＝コト」そのものは、不可逆的時間性、つまり老化がなす時間性において、反復不可能な唯一のことである。老化、バスティアーニの言葉を借りれば「実存者の過ぎゆき」という時間の不可逆性が、当の老化に内在した死の否定性によって消し去りえない、「存在したという事実(fait d'avoir été)」からなるコト性という、唯一性と消失不可能性を過去の実在そのものに与え、人間性を確保するのである。ジャンケレヴィッチの『第一哲学』(1953)における考察を参照するのならば「諸経過(laps)からなる連続性」は「わたしたちの自然性そのもの」であるが、その「連続性という事実(le fait de la continuation)」は「超自然的」なことである」(cf.Jankélévitch,1953,62)。

このように、ジャンケレヴィッチにおいては過去の実在の想起＝再現前化不可能性(反復不可能性)は、人の過去の実在に消失することのない唯一性と消失不可能性を与える契機としてポジティブに解釈される。

以上の「コト性」の構造を明瞭に示す文を、すこし長くなるが、引いておく。ここには「コト性」に関するもうひとつの重要な論点が示されている。

> いずれにしても、次のことは死ぬべきものの側からの仕返しであり、慰めであり、希望だ。つまり、死は生きている存在のすべてを破壊するが、生きたという事実(le fait d'avoir vécu)を無と化することができない。死は、個人の魂と肉体をもった構造を塵埃と化するが生きられた生というコト性(la quoddité de la vie vécue) はその残骸のうちに生き延びる。〔…〕ただ、われわれがコト性(quoddité)と呼ぶ、目に見え触知できない単純で形而上学的なこの何だか分からないものだけが虚無化を免れる。すくなくともこの点で、死の爪がけっして把えることのない不滅なものがある。〔…〕だが、他方、ほとんど非存在なこの実存(existence presque inexistance)は「無」というよりは「ほとんど無(quasi-nihil)」であり、非存在というよりは減少存在(moindre-être)だ。ところで、無とほとんど無(presque rien)との間には無限の距離がある。この「ほとんど」はまったく他なる秩序(le tout-autre ordre)を告げているのではないだろうか。(Jankélévitch,1966,458-460/四九八～五〇一)

以上のように、ジャンケレヴィッチは「コト性」を「ほとんど無」と言い換える。「あった」という過去の実在は、時間の不可逆性=老化において残存するために「無ではない」と同時に、「何か」という消失しうる「何性」ではないという意味で「存在でもない」。このよう無にも、存在にも還元されることのないパラドクサルな水準が「コト性」なのである。

老化の時間性、ひいては時間の本質である不可逆的時間性は、抗いがたく消えゆく存在者の有限性の悲劇であると同時に、その構造において、死によって消し去られない過去の実在そのものの唯一性と消失不可能性を当の存在者に残す時間性なのである。有限的な時間は、老化という不可逆的時間性として現実化することで、その有限性に抗した肯定的な過去の水準を残すものとなるのだ。

それゆえ、後期レヴィナスはジャンケレヴィッチの老化の解釈を経由することで[9]、老化

---

9 ジャンケレヴィッチはベルクソンの継承者という理解がなされているが、最新のジャンケレヴィッチ研究ならびにベルクソン研究からはその理解への疑義がしめされている(cf.Hansel,2012,Miravète,2017)。
ミラベットによれば、20 世紀フランスのベルクソン受容は、ベルクソン本人の哲学の受容

の不可逆性の過去の意義を見出すことができたのだ。老化の時間性が反復不可能であるせいで取り返しがつかないもの、朽ちがたさとして行為の「障害」とみなされた持続における「過去全体」は、ジャンケレヴィッチの時間論を介することで、1)老化の時間性が反復不可能だからこそ生じる過去の「唯一性」、そして死がもたらす絶対的な消滅への抵抗の契機、2)時間の本質として再解釈されたのである。過去の実在をジャンケレヴィッチが「コト性」[10]としてポジティブに捉えなおしたことで、後期レヴィナスは過去全体の「朽ちがたさ」、「滞留」から「意味」を引き出すことができたのである。

ところで、周知のように後期レヴィナスは倫理の構造の分析と、その倫理による存在論の乗り越えを試みた[11]。「隔時性」という概念はまさにその試みから生まれた概念である。それを示すように、レヴィナスは老化のうちにある種の対人関係という倫理を記述する[12]。

誰が不在であっても、誰かであることを、回避不可能な仕方で、呼びかけられる者、

というよりも、むしろジャンケレヴィッチ哲学の受容として捉えるべきである(cf.Miravète,2017,115)。
例えば、『二源泉』にかんする後期レヴィナスの評価は、明らかに、ジャンケレヴィッチが『アンリ・ベルクソン』第二版(1959)で加筆した『二源泉』にかんする「ある意味では『二源泉』は、『創造的進化』をとび越して、『時間と自由』に帰っているように思える」という『創造的進化』における超人間的な持続に対する人格としての持続への『二源泉』の強調についての言及に基づいている(cf.Jankélévitch,1959,192/二六二)。だが、ミラベットの考察をふまえるのならば、このジャンケレヴィッチの発言そのものが正当なベルクソン解釈と言いえるのかは問題である。またアンセルによれば、「不可逆性」という概念はベルクソンではなくゲオルグ・ジンメルに由来すると言う(cf.Hansel,2012,62)
[10] たしかにレヴィナス自身はこの概念に明示的に言及していない。「コト性」とレヴィナス哲学との関係性を探る導きの糸となるのは、レヴィナスにおける「ある(ilya)」という概念である。というのも、ジャンケレヴィッチは『第一哲学』においてこのレヴィナスの「ある」概念が、自らの「コト性」概念と結びつくことを明言しているからだ(cf.Jankélévitch, 1953,145)。ジャンケレヴィッチによれば、40 年代にレヴィナスが記述した「現前一般、現実化(effective)した現前、いかなる主体＝主語への述語の属辞的関係のない現前」としての「ある」は、いかなる「何性」も含まない「コト性」そのものなのである(cf.ibid)。
翻って、レヴィナスは初期ジャンケレヴィッチの論考をとおして「ある」概念を形成したことが、遺稿資料よりうかがえる(cf.Œ1)。
以上のような点を踏まえた上で、この問題にかんしては別稿にて論じたい
[11] ここではレヴィナスの言う「倫理」概念を以下のような発言に基づいて理解している。「私は倫理を語っているのですが、それは人間的なものである限りでの人間性のことなのです」(EN,127/一五四)。
このように、人間学的な関係性としてレヴィナスのいう「倫理」は理解することができ、かならずしも、規範倫理学のような当為的命題論として理解すべきではないのである。
[12] そもそも老化が初めてレヴィナスにおいて主題化『全体性と無限』での、老化の立ち位置は「顔の彼方」の問題系であった。「顔の彼方」の問題系と後期レヴィナスとの関連性にかんしてはベンスーサン,2014 を参照。

それが主体である。〔…〕(そして)老化という隔時的時間性としての存在者の***存在***という形で〔…〕(このような)呼びかけへの応答は生起する〔…〕。(AE,68/一三六,強調は原典,カッコ内は引用者)

なぜ、老化においてこのような「応答」という倫理的な対人関係が生じるのだろうか。

ここでも、レヴィナスの上記のような記述を理解する手助けとしてジャンケレヴィッチの哲学を参照することができる。なぜなら、後期レヴィナスによればジャンケレヴィッチの功績の一つは「持続の倫理的意義」(cf. HS,119/一四四)を引き出したことにあるというからだ。レヴィナスはジャンケレヴィッチ時間論のうちに、彼が倫理とみなす出来事の契機をもみてとっていたのである[13]。

実際、ジャンケレヴィッチにとって、「哲学の第一問題」とは「道徳」であり(cf.Hansel,2012,83)、その試みにおいて「存在とはまったく異なった秩序」(cf.Jankélévitch,1953,89)を彼は提示しようとしていた。だからこそ、「コト性」という「存在と無」、存在論の二元論に還元されることのない「ほとんど無」という概念を提示したのだ。ジョエル・アンセルによれば、ジャンケレヴィッチが『死』において死の無化に対する「コト性」の唯一性と消失不可能性を説いたのも、死を乗り越えると言う生命論的な意味からではなく、「あったという消失不可能性は」ショアーのような「人間の悪意に対する勝利である」という倫理的意味からなのである(cf.Hansel,2012,82)。

そしてこの試みにおいて重要となるのも、老化の時間的構造、不可逆性である。

ジャンケレヴィッチによれば、時間が不可逆であるということには道徳的な意味がつねに含まれる。それは、時間が根本的に不可逆で反復不可能であるがゆえに、現在においてなされたコト＝事実(fait)は、つねに「取り消せないこと(irrévocable)」だということである。それゆえ、為すこと(faire)[14]は常に倫理的な契機を孕むのだ(cf.Hansel,2012,80,84)。老化の不可逆的時間性とは、過去の実在を基づけるだけでなく、道徳的行為をも基づけるのだ。存在論ではない存在者の時間的構造、つまり「取り消せないこと」からなる道徳という時間性、それが老化の時間的構造である[15]。ここからジャンケレヴィッチは、特に 1953 年の『第

13 『他者のユマニスム』の序文のなかで、レヴィナスは明確に『死』におけるジャンケレヴィッチの考察が彼のいう倫理と結びつくことを示差している(『他者のユマニスム』,12/一九～二〇)。

14 事実=コト(fait)は為すこと(faire)の過去分詞形である。

15 より根本的に言えば、ジャンケレヴィッチの道徳哲学全体が、不可逆性に限定されない、

一哲学』において、道徳的な「為すこと(Faire)」の「存在すること」への優位を、存在論批判をおこなうのである(cf.同,92)。

存在論の乗り越えを試みと「隔時性」概念がレヴィナスにおいて最初期に扱われる論文「謎と現象」(1965)の注のなかで唐突にレヴィナスがこの論文の試みがジャンケレヴィッチ哲学に多くを負うものであることを明言したのは(cf.EDE,287/五三)、上記のようにジャンケレヴィッチの時間論がレヴィナス的な倫理の契機を示唆していたからである。

老化の時間的構造は死の無化により消滅させられない水準(「コト性」)を留めるだけではなく、他者の抹消不可能性を示すとともに道徳的行為を基づける倫理的現象なのである。

おわりに代えて

ジャンケレヴィッチの時間論を介することで、レヴィナスの老化の記述から「老いゆく」という時間的構造のなにが垣間見えてきただろうか。

それは、老化という傷つきやすく朽ちてゆく不可逆的時間性が、死の無化に対して(ほとんど無ではあるが)「意味」を残し、倫理を基礎づけるものだということである。そして、老化の時間性は想起＝再現前化不可能な受動的時間であるが、それこそが人間が生成変化し朽ちてゆく「時間」そのものだとレヴィナスとジャンケレヴィッチは論じるのだ。

ところで、村上靖彦は死を目の前にした臨床現場の分析を通して以下のように論じている。

> 死が近づくなかで自己を支えるのが、過去を思い出して肯定することなのである。過去の対人関係が、かすかに残っている現在の自分を支える。目の前の世界が身体の衰弱によって縮小していったとしても、過去の地平は縮小することがないからだろうか。あるいは行為が不可能になったときに、対人関係こそが自己性の核であることが

もろもろの時間性と不可分なものである。ジャンケレヴィッチの観点からみると、「私たちの生きることの倫理的規定は、それゆえ、私たちの時間にたいする関係の様態に依存している」(cf.Barillas,2017,133)。ジャンケレヴィッチの哲学とは、素朴なモラリズムではなく、道徳(的行為)と時間性との形而上学的な相即性の考察なのである。
つまり、ある意味でジャンケレヴィッチの道徳論は、道徳(的行為)が時間性に基づけられているという意味で、「越 - 道徳的(extra-morale)」な考察である(cf.同,124)。これは、レヴィナスが『時間と他者』(1947)以来行ってきた、倫理と時間との関係の考察ときわめて類似した態度であり、この点からも両者の影響関係がうかがえる。

浮かび上がるからであろうか。(村上,2013,233)

このような村上の問いに対して、これまでの分析を踏まえるならば、「目の前の世界が身体の衰弱によって縮小していったとしても、過去の地平は縮小することがない」と答えることができる。「身体の衰弱」つまり、想起=再現前化不可能な受動的「時間」としての「老化」は、逆説的にも、その消失に抗うような「過去の地平」、「過去全体」を残すのだ。

それにしても、レヴィナスもジャンケレヴィッチも老化の時間的構造を捉える経験を必ずしも老年期に限定していない。確かに、老化の不可逆的時間性が時間そのものであるならば、私たちは常に「老いゆき」その時間的構造を生きていることになる。ではいったい、老化、言い換えれば時間を生きる経験とはどのようなものなのか。

精神科医の浜田晋は、老化を論じた著作の中で自らの青年時代に「生きられた老化」を吐露している。

> それは、昭和十九年六月(十八歳)に始まる。旧制高知高校二年、学窓を離れて、四国新居浜の住友金属工場へ学徒動員に出た。私たちに課せられた仕事は、石炭を燃やして燃料ガスをつくること。〔…〕六人ずつ粗末な平屋に住まわされ、休日ともなれば縁側の日だまりで、パンツの縫い目にびっしりと群がる虱を親指の爪で一つ一つつぶす作業があった。
>
> その時、ふと、私は、「老化」を感じた。
>
> 青春のまっただ中にである。
>
> このまま大人にならずに—戦争へも行かずに—よぼよぼのじいさんになって、こうして日だまりの中にうもれているという想念にとらわれた。丹念に虱を殺す作業が、私を「老化」にかりたてる。その時妙な安らぎがあった。
>
> ただそこに生きる瞬間—私は「老化」を無性に感じていたのである。(浜田,2001,1-2)

このように、「老化」は私たちの日々の生きることのうちで、潜在的かつ受動的に過ぎゆき、不意にそれを意識させられることがあるのだ。

では、浜田が捉えた老化の内での「妙な安らぎ」とは何だったのだろうか。それは、パンツに虱がびっしり生えるほどの悪辣な環境の中で、戦争という「死」を見据えた中で、老化の時間的構造がその不条理な状況の中で尚も浜田が当時生きてきた 18 年間の「過去全

体」、「コト性」という「意味」を映し出していたということなのではないだろうか。

レヴィナスの老化の記述の人間学的な意義は、「老い」ではなく「老化」という一般的には否定的にとらえられる現象(「綺麗に老いた」とは言うが、「綺麗に老化した」とは言わない)を主題としながら、そしてなおもそこに人間性が確保されるような現象を記述したことにある。

老化、それは身体が朽ちてゆくことだが、そのような客観化された生物学的観点に留まるものではない。老化は、その時間的構造においてはそのような消滅に抗う意味、そして倫理すらも基づける現象なのである。

以上

凡例

本稿終わりに参考文献を設け、文中には著者名もしくは著作名、原典第一版発行年、頁数のみを記した。レヴィナスの著作に関しては、著者名ではなく、引用の多いものは以下の略号で、発行年は省略した。また、アラビア数字は原典の、漢数字は翻訳の頁数を指す。

『全体性と無限』: TI,『存在の彼方へ』: AE,『外の主体』: HS

『われわれのあいだで』:EN, 『神・死・時間』:DMT

Œuvres 1, Carnets de captivité suivi de Écrits sur la captivité et Note philosophiques diverses: Œ1, *Œuvres 2,Parole et silence*：Œ2

参考文献（発行年はすべて原典初版年を第一に記載）

[レヴィナスの参照著作一覧]

Totalité et infini—Essai sur l'extériorité [1961]〔Livre de Proche, Édition14, 2012〕/熊野純彦訳『全体性と無限(上)』、『全体性と無限(下)』岩波文庫

En découvrant l'existence avec Husserl et Heidegger [1947-1967]〔quatrième édition corrigée, Paris, Vrin ,2006〕/佐藤真理人 他訳『実存の発見』法政大学出版

Autrement qu'être ou au-delà de l'essence [1974]〔Livre de Proche, Original edition,1978〕/合田正人訳『存在の彼方へ』 講談社学術文庫

Hors sujet Livre de proche [1987] /合田正人訳『外の主体』みすず書房

Entre nous Essais sur le penser-à-l'autre [1991] 〔Livre de Proche, 5 edition, 2010〕/合田正人 谷口博史訳『われわれのあいだで—「他者に向けて思考すること」をめぐる試論』法政大学出版[1993]〕

Dieu, la mort et le temps[1993] 〔Livre de Proche, 5 edition,2014〕/合田正人訳『神・死・時間』法政大学出版[1994]

Œuvres 1, Carnets de captivité suivi de Écrits sur la captivité et Note philosophiques diverses[2009], publié sous la responsabilité de Rodolphe Calin et de Catherine Chalier, Paris, Grasset/Imec/三浦直希 渡名喜庸哲 藤岡俊博訳『レヴィナス著作集 1』法政大学出版局[2014]

Œuvres 2, Parole et silence[2011], publié sous la responsabilité de Rodolphe Calin et de Catherine Chalier, Paris, Grasset/Imec/藤岡俊博 渡名喜庸哲 三浦直希訳『レヴィナス著作集 2』法政大学出版局[2016]

[その他の参照文献一覧]

Barillas, Laure, 2017, *La reformation temporelle de la philosophie morale chez Jankélévitch* from Sous la direction de Flora Bastiani, 2017, *Bergson Jankélévitch Levinas* MANUCIUS

Bastiani, Flora, 2017, *Venir au monde/Quitter le monde* from 前掲 *Bergson Jankélévitch Levinas*

ベンスーサン,ジェラール、2014、「両義性と二元性ーレヴィナスにおけるエロス的なものについて」合田正人編『顔とその彼方』知泉書館 213-232

Bergson, Henri, 1907, *L'Evolution Créatrice* Forgotten Books/合田正人、松井久訳、2010、『創造的進化』ちくま学芸文庫

浜田晋、2001、『老化を生きる意味 精神科の診療室から』岩波現代文庫

Hansel, Joëlle, 2012, *Vladimir Jankelevitch : une philosophie du charme* MANUCIUS

伊原木大祐、2010、『レヴィナス 犠牲の身体』創文社

合田正人、1988、『レヴィナスの思想』弘文堂

Miravète, Sébastien, 2017, *Bergson, Jankélévitch ：une opposition sur le concept de temps* from 前掲 *Bergson Jankélévitch Levinas*

村上靖彦、2013、『摘便とお花見: 看護の語りの現象学』医学書院

Vladimir Jankélévitch, 1933=1966, *La Mauvaise Conscience*from *Philosophie morale* Flammarion,1998

同, 1953, *Philosophie première* Puf

同, 1959, *HENRI BERGSON* Puf/安部一智 桑田禮彰訳、1988、『アンリ・ベルクソン』新評社

同, 1966, *La mor*t 〔Camps essais,1977〕/ 仲沢紀雄訳、1978、『死』みすず書房

和田攻 南裕子 小峰光博編、2002、『看護大辞典』医学書院